
占夢者人の夢 ~弐ノ巻・前編~

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占夢者人の夢 ～式ノ巻・前編～

【EZコード】

N5499D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

天使は全てを知っている・・・」の言葉がキーワード。事件に絡む悪夢と、靈。都住朔夜の婚約者、錦織神楽の登場と、塚原叶の悪意ある事故。ミステリー調で始まる、式ノ巻き前編をお楽しみください。

#1 プロローグ

閑静な町並みに吹き抜けて行く風。既に太陽は地平線を通り抜け、冴えざえとした満月が頭上にある。都会の空気は全てを飲み込んでしまうかのようで、息苦しく感じられ、ビルの屋上に素足で立っている一人の女性はあるで何かに誘われるかのように足を踏み出していた。

一步一歩踏み出して行くその足取りは、ふらついてはいるものの、しつかり意識はあった。右手に持った、一枚の紙切れは風に煽られ『カサカサ』と音を立てる。そして右手には今風のサンダル。それからその紙をサンダルで押さえるかのように、ビルの縁に添えると、引き込まれるかのように、その一步を踏み出した。まるで背中に羽根が生えているかの『』とく。

天使は全てを知っている

最後に残された言葉は、何かを暗示するかのように、ただその場所に残されたのである。

#1 プロローグ（後書き）

前編と後編に分けております。

占夢者人シリーズ。壱と番外編を先に読まれておりますと、よりキャラ配置はわかりやすいと思われます。
もし宜しければそちらもご覧下さいませ。

憂鬱

今は夏まつさかり、地上に照り付ける太陽光線は、素肌をじわじわと焦がして行く。たまに降る雨は焼けたアスファルトを叩き付け、雲摸様はすぐに変わり蒸し暑さをかもし出し、このアパート中にその代償を払えと云わんばかりに責め立ててくる。

そんな、起きだちの塚原叶は団扇を煽ぎつつ、吹き出してくる汗を首に掛けているタオルで拭いながら、テーブル脇にあるリモコンでテレビを付けた。

『昨夜の事件です…』

画面を見る事無くただアナウンサーの声に耳を傾ける。テレビは共有の場所、ダイニングキッチンの端に設置されてはいるが、基本的に叶が独占する形がこの共同生活の綻のようになっている。

『東京、下北沢で、二十才前半の女性が〇〇マンションの屋上から飛び下り自殺をはかると云う事件が起きました。警察は今、この女性の身元及び、動機を調べることを…』

流れで行くスラスラと発せられるセリフを聞きながら今氣が付いたとばかりに、冷蔵庫から冷えた麦茶をコップに注ぎ込む。そして一気に飲み干す。

『なあ……ここ下北沢での事件多ないか？』

そう、どういう訳かここ最近の下北沢は殺人事件を始めに自殺、強盗と相次いで起こっている。

その事について意見を聞いたりと既に起きて、自室で相変わらずネットを楽しんでいるであろう都住朔夜に問いかけた。

『……………』

しかし関心を払わない朔夜に、叶はまたいつも事だと想つていてが、どうやらそう云う訳では無さそうなのが目の端に映り、

「なんや? ネットに夢中にしどのんかと想えば、やつはひ詠やないんやな~」

珍しく、ノートパソコンの前で手を止めていて、心ここにあらずといった様であつた。その様子を不思議に思い、団扇を片手に朔夜の部屋に入る。

「あ……まあ、色々と……」

そこで黙り込んだので、ハツと気が付き、

「そりいや、明日やつたよな? 都住家恒例の一族会議つてのは。明日は一日帰らんのか? 年に一度の適例会議つてのも難儀やんな~俺ならそんなもんぜつてえ~ボイコットするわ」

顎に手を掛け未だ片付けられていない万年コタツの脇に『ドカツ』と腰を下ろす。

叶は、中学一年に家を出たきり一度も実家には顔を出していない。その後大学を何とか卒業するまで叔父、叔母の所で一緒に生活した後、これ以上お世話になる訳にはと、家を出て今ではこのアパートに居候しでいる。

「はあ~」

この時期になると、溜め息がこぼれる朔夜を知つていて、この時ぞとばかりにいじわるな態度にでる叶。確かにこいつ朔夜はいじめ甲斐がある。

「やつほ~明日はバイトも休みやし。朔夜もあらんし羽根のばせやうやなあ~かえでちやんと二人きりになるチャンスなんて滅多に無いから遊びに来てもううつうつに連絡とつとこつと~」

かえでに疎まれてる事くらい知つていて、敢えてこう云う事を云つて退ける辺りかなり図々しいかも知れないとは分かつてはいても、持ち前の前向きの性格は隠す事すら無い。

「食事は、冷蔵庫の中の物を適当に食べて下さい。そろそろ賞味期限の納豆が有るはずですから……」

おぼつかない言葉に霸気が感じられないが、一応反撃はしてくる。

「納豆嫌いなん知つとるやん……嫌みなやつちや~!」

叶はそう云うと、

「ほな、バイト行くわ」

時計を確認し、さつさとドアを後にした。

都住家の適例会議は仕事の確認と、親戚達の内輪話といったもので、特に憂鬱になる事などは一切なかつたが、ここ一年間結婚に関する話題が持ち上がつていて、実はこの事が、朔夜の頭を悩ませていた。

もともと、父が熱烈恋愛結婚で落ち着いた話から始まって以来、離婚話で母と別れた事で親権問題が浮上、その事が一族の不名誉的因素を嫌といつまで聴かされてきた。

そこで、朔夜にはそう云う事にならないよにと宗家の連中は既に許嫁と云う、古典的な方法を用いて朔夜の結婚相手を選んでいたのである。

相手は、選りすぐりの名家の出の錦織神楽（二十四歳）。大学も一流大学を出たばかりといつ、何も申し分の無いお嬢様である。しかも、都住家に関する事を理解している上に、祖母のお気に入りときていた。

それでも反論出来るのであれば何も問題は無いのだが、宗家には、父亡き後全てのスポンサーになつてもらつていて、為に何も云い返せない。しかも、朔夜はその錦織神楽と云う女性に逢つた事すら無かつた。

「はあ～」

今一度溜め息がもれる。延ばし延ばしにしていた今までの事を想うと、きっと今度こそはと祖母は話を切り替えてくる事になるであろう。

そう考える度に明日が世界の最後であれば良いのだと今まで想つ程想いつめていた。朔夜的には都住家を存続させておく必要性を自ら負いたくは無かつたのである。

儀式

「うんじゃま、行つてらッしゃーい。『ゆつくりー！』

小憎らしいとも想える程の満面の笑みを携えて、居候の身の叶は、タンクトップ一枚に涼やかな扇風機を従えてキッチンの椅子に腰を下ろしながら朔夜を見送る。

それは、晴天の真夏の朝日が昇つたたそんな時刻の事。

それを尻目に一応微笑んでアパートのドアを後にする朔夜は、心の底から『身の程知らずめ』とボソボソと呟きながらも溜め息がもれる。

しかも、正装のスーツ姿が身動きづらくてまた一つ気分が優れない要因となっていた。

都住家は、ここから井の頭線に乗り渋谷に出て、山手線に乗り換え王子まで行かなければならぬ。

お盆前まだ通勤ラッシュのこの時刻、考えただけでも人込みに弱い朔夜にとつては地獄絵図の中に身を投じる気分だつた。それでも、王子の近くにまで来るとそう云う気配は無くなり不快指數は大分和らいだ。そして、重い足を引こする気分で、宗家都住宅へと急ぐ事となる。

「まあまあ、暑い中良くいらっしゃった事だわねえ、朔夜さん」
一物も一物も隠し持つてゐるかのような祖母は、朔夜の到着を笑顔で迎える。

「ご無沙汰しておりました。お元気そうでなりよりです、
父が亡くなつてから面倒を見てもらつていただけに、この家の事は何よりも良く判つてゐるもの、他人行儀に、
「失礼します」

涼やか微笑みを浮かべながら、祖母の後に着いてスーツの上着を

たたむと腕に引っ掛け中に入つて行く。

『ミシミシ』と響く廊下の音は、あの頃となんら変わりは無い。

「この都住家は代々受け継がれてきた家柄をモットーとして立て直すと云う気配すらなく、庭にある獅子彫しの『カーポ』という涼しきな音すら格式を高めるかのようで和風さながらの都会の一種の避暑地のようであった。

「お爺様は？」

通された座敷きの座布団の上で、まだ見えぬ祖父の事が気になる。いつもなら、先にこの場所に来ているのであるが……

「ここ最近、体調が優れなくて床に臥せつてゐるのですよ。朔夜さんがこられる事を楽しみにしていらしたのに残念ですわ……」

暫くすると、奥の部屋から麦茶を入れたグラスとお茶葉子をお盆にのせ侍女が入つて来る。

「奥様、失礼します」

冷えた麦茶のグラスが白く曇つているのを確認し、朔夜は一口口をつける。座敷きには、まだ他の親戚は来て無い様子で、二十畳の畳の部屋はがらんとしていた。その分空間が広く感じられ、自らの部屋との違いを嫌と云つ程感じると、愛着有るあの部屋に早く帰りたいとさえ感じる。

「他の方々は？」

しかし、いつもの時刻にも一向に現れない事を確認した朔夜は静かなこの部屋で黙つて祖母と向き合つてばかりいるのもなんだなと感じ始め、切り出す。

「今回の適倒会議は、以前からお話していた朔夜さんの結婚話を改めようと思つていたので日にちをずらす事にしましたのよ」

率直すぎる祖母の発言に、『ついにきたか！』と朔夜は笑顔で微笑みながらも内心鼓動が鳴り止まない。

「その事でしたら、前にも云いましたが、僕にはまだそんなゆとりも気持ちもございませんので失礼させて頂きたく思います」

ここで抜け出さないと、畳み掛けてくるであろうことなど分か

り切つて いる。昔からの痛い経験は、朔夜に学習能力を持たせてくれた。この祖母の言葉は絶対なのだから、……

「お待ちなさい、朔夜さん。逃げても無駄ですよ！」

朔夜が片足を立てたところで、逃がすものかと祖母は言葉を挟む。

「お入りなさつて！ 神楽さん！」

すると、先程侍女が入つて来たその襖が『ス』っと開くと、一人の艶やかな御所車の和服姿をした一人の女性が、畳に指を付いて座つていた。

「こちらが、朔夜さん貴方の許嫁の錦織神楽さんですよ」

すると、

「初めまして、わたくしが錦織神楽と申します」

静かに面をあげると、そこにはいかにも物静かでおつとりとした、（はつきり言って朔夜好みの）女性の顔が、露になる。

「お話はお聞きになられると想つておりましたのですが……何か御都合の悪い事なのでしょうか？」

神楽は、見た目通り少し控えめに言葉を発する。

「あ……その……」

理想像の女性を前に、一瞬言葉をとぎらせてしまつた事に、しまつたと想つには遅かつた。

「いいえ、神楽さんお入りになられませへこちらこちらしてお話でも致しましよう」

祖母の思惑にハマつたのである。

「ご存知だと思われますが、こちらが孫の都住朔夜と云いますのよ。お会いになるのは初めてでございましょ？」

祖母は、二口一口としながら朔夜の事などお構い無しに話しあじめる。

「はい。お写真では拝見致しておりましたが、このよう、実際お会い致しまして落ち着きました。お写真よりお優しそうな方なので大変安心致しました」

はにかむかのようなその笑顔が朔夜の中で、色鮮やかに映る。

「朔夜さん？ 神楽さんは、都住家の遠い親戚筋で、錦織家の御長女でいらっしゃいますのよ。一流大学をお出になり、才色兼備。何も申し分も無い女性ですわ。しかも、朔夜さんのお仕事を理解されての縁談。これ程の縁は無いとまで想いますよ？」

祖母は、これ見よがしに段取りを進めて行く。

「あ……そうですね……でも……」

朔夜は返事に困つてしまつ。理想像と、自分の人生をそう簡単に決められる訳には行かないのとの一つで躊躇っていたからである。今さらながら、あの時さつさと席を外しておけば良かったと想つても遅すぎた。

「はつきりしなさいー！ 朔夜さん！」

祖母の言葉と、神楽の不安そうな眼差しを両方から浴びて、狭い空間に押し込められたような感覚に陥つてゐる時、

「そうですね。朔夜さんお困りになられてはいるようですし、お時間も少しお取りになられた方がよろしいのではないでしょ？ おばあさま？ 朔夜さん。お時間がよろしければ、少し、お庭でも見て回られませんか？ あちらに、木陰の良い場所が有りますわ」

庭先に有る一本の大きな松の木の下に大きな小陰が出来てゐる。そこに一人分座れるくらいの椅子がある。そう云えば、昔はその下で本を片手に昼寝をしたものであつた。

「まあ、そうですわねえー！ それでは、御座を持つて参りますからお二人でお話でも！」

神楽の口からその言葉を聞くや否やすぐ行動に移る祖母。このバイタリティーが有れば当分は平氣だうなと想う朔夜であつた。

「先程はありがとうございました」

朔夜は祖母から解放された事に少し気分が落ち着いていた。

「何のことですか？」

神楽は、にこやかに微笑みながら少しどぽけたかのよつて言葉を発する。その事に気がつき、

「いえ、こちらの事です……それにしても、神楽さんは勝手に許嫁などと決められて……こういう事になつて平気なのですか？」

遠回しに訊くよりは、はつきり訊いてしまつた方が良いだろうと朔夜は想つた。

「わたくしは嬉しく想つておりますの。いつもお逢いして、はつきり自分の気持ちが分かりましたわ。お写真だけでなく、こうしてお逢いして……どう云う方なのはこれからおつき合いで行けば分かつてくるとも想いますわ？でも、第一印象が良いという事は、何かしら御縁があつた証拠だと想います。もともと殿方と面識は無いものですから世間知らずとは想つてはおりますが」

神楽は、ハツキリと自分の言葉で応える。それが、何も恥じらうこと無くいうものだから、逆に朔夜は動転してしまつた。朔夜自身、女性には疎い。というか、今までこういう感情にお目にかかつた事は無いに等しかつた。

「……本当は僕に彼女がいるかも知れないと想われた事は無いんですか？失礼。先程の、祖母との会話をお聞きしてれば容易に考えられるでしょ？」

すると、

「『僕にはまだそんなゆとりも気持ちもございません』と云う事ですね？それは、お仕事の事があるからだと想つておりますし。それに、朔夜さんのお母さまの事をお聞きしてありましたから……勝手な憶測かも知れませんが、朔夜さんは、女性に関して随分とトラウマを持たれているのでは？と察しておりましたから」

見事に云い当てられる。これは叶にも云われた事の無かつただけに、心に『ズシリ』と来た。

「母は、父の仕事の事を知つていながら、それでも一緒になりたかった……勘当同然で、二人は一緒になつたものの、最終的に理解が出来なくなつた母は結局離婚を決意した……後で祖母から聞かされた事です」

それは、祖母の口からだけで無く、親戚の間でも噂というネジま

がつた言葉で聞かされてきた。だから思つた。決して結婚はしない
と……

「それにしても、良いお天氣ですね」

「氣を効かせたのか、神楽は話をそらす。

「女のわたくしからお誘い致しますのも恥ずかしいのですが、今度の日曜日、ご都合が悪く無いのでしたら一日おつき合いして頂けませんか？」

突然の申し出に、戸惑つた朔夜ではあつたが、断る謂れも無く、それに女性に恥をかかせる訳にも行かず肯定の言葉を伝える。

「そうですね。それでは来週の日曜日、八月十六日にデートをしましょう。お盆過ぎですから、丁度帰省客くらいの人込みの少ない時期……上野の美術館にでも行きませんか？開いてれば良いのですが？調べておきますよ。御絡先を教えていただければ、改めてこちらから御連絡致します」

その言葉に、一瞬神楽は大きな瞳を見闇いたが、直ぐににっこりと微笑んだ。その表情に、一瞬『ドキッ』とする朔夜ではあつたが、そう見せないようになつすらと笑顔を返したのであった。その先は、神楽の家族の話や、世間話に華が咲いたのであった。

未遂

久々の休息。そう想つて、かえでは忙しい毎日の仕事への労働を省みて『フツ』とソファーに寄り掛かっていた。雑誌の編集の仕事は朝も無く夜も無く自らを奮い立たせないとやっていけないと自覚はしているものの、こうやってかえつてのんびり過ごしてみると、見えない何かが手招きしてくるかの様で落ち着かない。

「やっぱり仕事している方が落ち着くわね~」

『ヨツ』と腰をあげると想いつきり背伸びをしてみる。すると、今日やるべき事は全て済ませてしまつたんだという事に気が付き、再びソファーに腰を下ろす事になる。

「夕飯も食べ終わつたし……つまんないから悪戯電話でもしようかな~」

と、想い立つたのは早かつた。ま、悪戯と云つても、今頃独り落ち込んでいるであろう叶に電話すると云うだけの事ではあつたが。

昨日の夜に『遊びに来んか?』と誘われていたのを結局断つた訳だが、実際こう一人でいると何かしら物さびしいのであつた。この辺りがかえでの悪い癖だとは気付いているものの、改善しようとは想わないのである。

テーブルの脇に置いている携帯電話を取り上げると、予め登録されている番号を呼び出そと指を動かして、いたその時、自らの頭上から水が携帯の液晶に『ピチヤン』と落ちてきた事に気が付き、何だろうと手を動かす事をやめた。

どうやら天井から水滴が滴り落ちて来ているようだ。

「やだあ~何これ~?」

時間が経てば経つ程その量が増していく。

かえでのアパートは五階建ての三階角部屋で、鉄筋造りでは有る

が、築十年でそう新しい所では無い。もしかしたら、上の住人が水を出しつ放しにしたのかも知れないなど、上の階に早めに文句を云いに行く事にした。

こういうケースは実は極稀に有る事だつたりする。洗濯機の排水溝が壊れてしまつてたり、トイレの排水溝が壊れてたり……でも、このアパートに入つてからはこんな事は無かつた。だから、これ以上の被害を防ぐ為にはこうする事が最善の方法だつたりするのである。下手に管理人を呼ぶのは避けたいものだ。そう感じたからこそ、真上の階に繋がる階段をのぼつて行つたのである。

「すみませーん」

インターフォンを鳴らしながらかえでは想つた。こここの住人つて、最近入つたばかりで、確か年頃は自分と同じくらいの女性よね~やっぱ洗濯機の排水溝かな?なんて、ぶきつちな人なのかしら?一瞬笑いたくなつたが次第に時聞が経つにつれその余裕をかます事が出来なくなつてきた。

誰かいるはずなのに、実際誰も出てこないのである。外に設置されている、電機メーターも回つているのに人がいる気配が無い。魚眼レンズの先を覗いてみたら明かりはしつかり届いていた。

「そんなはずは無いわよね……」

だんだんと嫌な予感がしてきた。こういう時の女の勘と言というのは、えてして正しくて、必ずと云つて何かが有ると踏んで間違いが無い。

「ダン!ダン!ダン!」

大きな音を響かせて細い拳で戸を叩く。がしかし誰も出でてはこない。こうなつたら最終手段だとばかりに管理人を連れてくる事にした。こういう時、同じアパートに管理人が住んでいてくれているのは有り難いと想う。以前のアパートにはいなかつたから……

「管理人さん!すみません!!四〇一の方の部屋が変なんです!合

錠持つて来ていただけませんか！」

突然訪れた客は息せき切つていて、見た目にも只ならない様子な

事に気が付かない訳は無い。

「あら？ 二〇一号室の佐簾さんじやない。どうしたんです？ こんな時聞に！」

と云つてもまだ八時前。まだ日が沈んだくらいの時聞帯である。

「訳は後で話しますから、直ちに合鍵お願いします！」

かえでは、管理人の重たい腰を叩くかのように息巻いていた。

「何号室ですって？」

「四〇一です！ 早く！ 急いで……！」

有無を云わせぬ押しの強いかえでの声色に、管理人も根負けして、云われた通り鍵を手に四〇一へと階段をのぼつて行つたのである。

「誰もいなはづないです！ 私の部屋に、上から水が落ちて来て……もしかして、倒れているかも知れない……！」

鍵を闇けようという瞬間、かえでは簡単に事情を説明した。鍵は合鍵によって簡単に開けられる。それをかいぐるかのよつにかえでは一目散に部屋へと入り込んで行つた。

部屋の奥から水が流れ出している音が鳴り響く。電気も付けっぱなし。かえでの部屋と全く同じ作りの間取りに気付き、洗濯機を置く場所へと向つてみた。が、違つていた。これは……と、気が付いた時、赤い水が自らの瞳をとらえた。そしてその先を田で追つた。

「キヤー…………！」

かえでが見たものは、真っ黒な髪を湯舟に浸し、風呂場で手首から血を流して気を失つている女性だつたのである。その声を聞き付けた管理人は、かえでの後ろで泡を吹く様にして腰をぬかしていた。かえでは慌てふためいてはいたが、心の中の突き動かす想いが、行動として表れ、水が溢れ出ている蛇口を捻り、

「管理人さん救急章を呼んで下さい！ 早く！ ……」

と、対処に励んでいた。

まず止血しなくてはと、そのびしょぬれで重たい女性をいつたん

リビングへと運び出す。そして、流れ出る血を止めようと、自らのハンカチを取り出すと、手首の上できつく巻き付けた。

その女性の貧血した顔色は見るからにも死んでいるかのようで、忍びなく……かえでは目を背ける。

管理人も、流石に驚いてばかりはいられないと、『バタバタ』部屋を駆けずり回り始めた。一刻を争うこんな事態に、ふと、かえではテーブルの上に残された一枚の紙切れが目に付いた。

「何かしら、これは……」

かえでがその紙に気が付きそれを眺めるとそこには、

天使は全てを知っている

その一言が残されていた。

好奇心

「ただいま」

次の日、予定通り朔夜は帰宅した。まだ頭の中は本調子にはなれなくて、足が地面に付いて無いそんな時の出来事であった。

「おはようん！朔夜ちゃん！」

何故だか分からぬいが、朝から妙なテンションのかえでが上がり込んでいる事に気が付き、一気に現実に戻されたような気分で一瞬目眩がした。

「よおー早かつたなあー」

相変わらず、タンクトップ一枚で扇風機を一人占めしている叶。

「晩まで帰らんのかと思つとつたわ～」

一瞬、ギロつと睨まれた気がしたが、まるで隠すかのように瞬時に一コリと笑った。

「お郡魔したのかい？」

朔夜は、自らの都屋に向おうとした通りがけに小声で囁く。叶は嫌みやなと言う表情をしたが、切り返した。

「えらい一コースがあるんやわな！かえでちゃん」

と、いつことで、昨日の夜の事の次第をかえでと叶は話し始めた。「えらいことやでーかえでちゃんのアパートつて、下北沢の端の方やろ？やつば何があるで、これはー！」

興味津々な叶に、

「考えてみれば、そうよね。云われるまで気が付きもしなかったわ……暇人はこうこう時に役に立つと云つからそれかもね～発想が飛んでて！」

少し、嫌みを込めてかえでは云つ。忙しくて手が付けられなかつたら、世間の事なんて疎くなるのも当たり前だとでも云つかの「こと

く。

「何云つてんねん。博識の常識！この時代何が起こつとるんか知つとらんかつたらいかんのや！」

膨れつ面の叶は、かえでに舌を出す。

しかし、そんな事お構い無しに、

「でもね、あの後、不思議な事を聞いたのよね～あの置き手紙？つていうのかしら？遺書？警察の話を小耳にすると『天使は全てを知つている』つての、前に起こつた自殺現場にも残されているんですつて！でも今回は、未遂で終わつたから、事件の鍵は彼女が握つている可能性を大きく示唆出来るんじゃなかつて警察は考へてゐるみたいよ！」

かえでは事細かくは知らないらしいが、そんな事を口走る。

「ニユースでも取り上げられて無かつたのに滅多に周じ遺書なんか残さんわな～やっぱ何があるで～探偵じやないけど何かわくわくするわ～」

そんな不謹慎な事を云つて退ける叶に、朔夜は、

「叶？バイトは？行かなくて良いのかい？」

お決まりの止めの一言を申し渡す。これを引導と言つて差し支えないだろ？

「わあ～しもた～忘れとつた～」

叶は、一皿散で自らの部屋に入り支度を始める。

それを横目に、朔夜とかえでは和やかに話をすすめる。それが叶の耳に雑音として聞こえて気が散る。

「ほな！行つてくるわ～後は帰つて来てからな～かえでちゃん～」

珍しく、かえでが手を振つてくれたのが嬉しくて、出掛けの靴を危うく履き間違えそうになつたが、落ち着いて、何とか出発する事が出来たのは、この時良かつたかも知れない。後で、大変な事に巻き込まれるのであるのだから。

「で、かえでちゃん？今日はその事だけに僕の所に来た訳では無い

でしょ？もしかしてお仕事ですか？」

朔夜は、慌てふためいた様子の叶を送りだして笑つてはいたが、仕事の事となると真面目な顔になる。

「あはは……そう云つてでも無いんだけど……」

仕事の話じゃ無い？はて？と、不思議そうに小首をかしげる朔夜。云い出しづらそうなかえでであった為か、

「叶の事ですか？」

少し悪戯っぽく笑つて朔夜はかえでに問ひ返す。

「ま、あんな奴でも、誕生日くらいは祝つてやうかなと想つてね……」
朔夜の部屋のコタツの上で『ポリポリ』と頬を人さし指で搔く癖は少し照れくさい時のかえでの癖である。
「誕生日？……あ、そう云えば、叶の誕生日は明後日ですね～すっかり忘れてましたよ」

あははははと、笑つて誤魔化しておいた。そういう事によつて、かえでに意地悪をするのも面白い。

「居候ですものね。朔夜ちゃんにとつては！」

少しムツとするかえで。いつもいつも居候扱いで叶にあたるかえでではあつたが、内心はそうは想つていないらしい。

しかし、叶にしても、かえでにしても感情表現が豊かなだけに、朔夜にとつてこれは生きる上で絶好の楽しみなのである。

「で、サプライズ・パーティーならあたしも面白いし、いい趣向でしょ？どう？」

意外にアメリカナイズされてるなとは想つたが、快く引き受ける事にした。ま、バイトをクビになるのを覚悟していつも仕事に付き合わせているし、こいつ時に何かしておくれのも後々有利に立つかも知れないと云う気持ちもある。

「そうですね。面白そだからその話乗りますよー。」

二人はその後、どう驚かせよつかと云つて意見で盛り上がるのであつた。

危惧

叶のバイトは、午前、午後、共に掛け持ちのバイトである。

朝は、渋谷でレストランのウェイター。夕方からは、新宿歌舞伎町で、ホストという接客を中心としたアルバイトである。

叶自身、ルックスを生かした仕事を選ぶのは訳ない事であつた。その上、人懐っこい性格が、客を呼んでくれるから店自体は簡単にクビにする訳にも行かず、上手く溶け込んでいる。

特に、ホストとしての仕事は正社員にならないかと誘われるまでに、人気を博していた。しかし、叶自身そのつもりは一切ない。ただの呼び込みアルバイトから始まつたこの仕事。給料面ではかなり美味しいのである。しかしこの仕事をいつまで続けられるのかは疑問では有るが……

「お疲れ、今日も一日大変な人気だつたな」

と、源氏名のユウジはロッカールームで叶に笑いかけてくる。

昔から、女の子に人気があつて男友達の少なかつた叶にしてみれば、こうやって気軽に話しつけて来られる事は滅多に無かつたが、この仕事を始めて、意外に友人が増えてきた。特に、開放感一杯のこの性格が役に立つてゐるのであらう。別段、他の従業員に羨ましがられる事は無かつた。逆に可愛がられている。

「でもよ、最近入つたあのマサキってやつ?かなり御指名多いやん!今まで、キヨウの成績上まわる奴いなかつたからさ~氣を抜いてると、追いかれちまうぜ?」

叶は、ここでの源氏名はそのままキヨウという。しかしこの話に首を突つ込んで来たサトシは、忠告がてらにそう云つ。

「う~ん。あんま気にしてないわ。お客が誰を指名しようと勝手やん?一時の女性の安らぎを得られるんやつたら俺嬉しい想つもん」

欲張るつもりは無い。ちゃんと給料さえ頂ければ何も差し支える事など無いと叶は想つている。

「良い子振るなって！ホントは内心メラメラしてるんじゃん？」

そんな余裕めいた叶に、サトシは少しカチンと来た。でも、敵意があつての事では無く叶の事を想つて云つてくれる。だから叶はそんな言葉にいちいち怒る事も無い。

「ほり、来た。噂のマサキ！」

ボソリとサトシは叶に囁く。

「お疲れ様です」

マサキはドアから入つて来て、挨拶を交わす。この机席では、特に新人は先輩後輩の位置付けがはつきりしてゐるから、無愛想ながらも、整つた顔で言葉を掛けてくる。

「お疲れさんやな～どうや？もつ慣れたか？」この仕事は？これから軽くみんなで食事でもして行かんか？」

叶は、早く打ち解けられるようと気配り、軽く声を掛ける。がしかし、

「あいにく、この後用事がありますので……」

硬派気取りの、マサキは誘われても「ひとつもせず上手くかわしてくる。いつもこの所が、きっと他の社員やバイト生にとつて苛つくる原因であろうと叶は想つた。でも、無理に誘つのも気が引ける。

「そりなんや……残念やな～ほな、また今度な～」

「それでは、また」

と、あつたり着替えが終わったマサキは裏口から出て行った。

「なんだ？あの態度は！」

サトシは、あの鋼鉄の面を壊したいともいわんばかりに『チツ』と舌打ちする。

「まあまあ、ええやんか。ヒトそれぞれ事情つちゅうもんが有るんやから～」

周りを気にしながらも、仲間内のこいつたこぞいが仕事をやりにくくするだろと簡単にフォローする事にしてくる。でも、そ

の内何が度派手な事をやらかさないか心配な所もある。

「ほな、今日は軽くラーメンでも食つて帰るか?」

と、今あがつたばかりのバイト生を引き連れて近くのラーメン屋へと向つのであつた。

それは、十時過ぎの頃の出来事である。

「そんじゃな〜氣を付けて帰れよな〜」

夕飯をいつも食べ損なう叶は満腹感をやつと感じながら、JR新宿駅の東口から渋谷まで出ようとみんなと別れを告げた。

余り遅くなると、電車に間に合わない。それを見越して、急ぎ足でただひたすら駅を目指す。家の鍵は教訓のように持ち出し忘れて無いかポケットを探りながら。

こうして、叶の一日は過ぎて行く。何も変わる事なく……だけど、叶には丁度良い仕事配分ではあつた。

終電間近の駅のプラットホームは朝より空いていて開放感を感じる。そして渋谷で井の頭線に乗り換えようと白線の内側で、次やつてくるであろう電車を待つ。

渋谷の駅前で買ういつもの夕刊。それを眺めながらいつ来るであろうかと、独り待ちぼうける。

それもいつもの事。慣れた感じで耳をすましていた。

そんな時、アナウンスが流れてくる。

「白線の内側でお持ち下さい。まもなく電車が参ります。」

云われなくとも、分かつとるわと、新聞を折り畳むと白線ギリギリの所で終点の電車を待つ。それもいつもの事。

しかし、入ってきた電車が目の前に移る時、想わぬ事が起こつたのである。

「ドンツ」

緩やかに止まろうとブレーキを掛け始めた電車に向つてプラットホームから思いっきり突き落とされたのであつた。

叶自身、何が起こったか分からずに、走り込んでくる電車の線路中央に頭から落ちてしまった。

向つてくる電真。

このままでは電車にぶつかると頭では分かっているものの、どう云う訳か、体が想うように動きが取れない。びくともしない身体を残しつつ、視線は電車を見据えていた。色々な事が脳裏を掠めて行く。でも早くどうにかしなければ……しきりに想いは募るが、まるで突然光を前に立ちすくむ猫のようにビクリとも動かない。

プラットホームの方で何か騒いでいる。

その声を聞きながら、叶の意識は朦朧とした。

そして、意識はその遠退いて行つたのであった。

突然鳴り響く、携帯の着信。

こんな遅くに、携帯が鳴るなんてどう云う事だ？

朔夜は、いつも充電している携帯の充電置き場に足を運んだ。

それは、明後日のサプライズ・パーティーに必要な物を取り繕つている最中の出来事であった。

携帯の蓋を開けると、知らない電話番号からの着信。全く予測が付かないが、鳴り止まない電話の着信音は悪戯電話では無さそうで、受話器を取り上げる。

するとそれが、救急病院からの電話である事を取り上げてから初めて知り得たのである。

「確かに塚原叶は、僕の家の同居人です。そうですか、わかりました。それでは今からそちらに向います」

朔夜は、冷静に救急病院の名前を聞き終えると、簡単に、戸締まりをし、一気にアパートから駆け出した。

必要な持ち物を取り上げて。

救急病院は、お盆前だというのに混雑していた。

救急看護受付で、叶の移されている病室を聞き出すると、朔夜は足

早に歩き始める。そして、病室の扉を静かに開いた。

そこにはベッドにグッタリと横になっている叶の姿と、看護師がいるのが目に入った。

「都住さんですね？」

「はい」

事の次第がイマイチ掴めなかつた朔夜は、担当であるその看護師に話を聞く。

「井の頭線の渋谷駅に飛び込んだのか、突き落とされたのかはハッキリ判かりませんが、線路で頭を打ち付けたようで今、安静に眠つておられます。が、右鎖骨を複雑骨折しているみたいですので今は鎮痛剤を打ち、簡単に処置はしておきました。今日は専門の外科医がお休みなので明日にでも緊急手術をしなければいけない状態です。それにしても、幸いでしたね。周りにいた方々の話だとプラットホームの横に設置されてある穴に最後の力を振り絞つて、身を投じたらしく、何とか一命を守る事は出来たようです。彼は運が良かつた。脳波を調べて異常が無いようなのですが……念のため一応眠つている時の脳波の方も検査しておきたいと想いますが、宜しいでしょうか？」

「こういう事は、家族の承諾も必要なのであるが、叶の生い立ちを考えると今となつては、そう云つては行かない。」

考えてみれば朔夜は、叶の実家について知つてゐる情報は皆無なのである。

取り敢えず、叔父さん宅へは報告しなければならないであろう。しかし、夜間いたずらに心配を掛ける訳にも行かないかと、今日の所はこのまま連絡を取るのは避けようと思った。そして、眠つてゐる間の脳波検査を承諾した。

「ところで、都住さんと云えば、夢占いに通であるとか？時々雑誌や本に目を通しておりますが……御本人様でしょうか？」

「意外な事を聞かれて戸惑う朔夜。

「ええ、そうです……が

「やはりやうなのですね。いやあ～こんな所でお目にかかるとは光栄です。患者さんのスケジュール帳を見て名前と電話番号が控えられていたので、もしかしてそつではないかなと噂していたんですね。また論文など出されたら読ませて頂きます。それでは脳波検査の準備も有りますので私はこの辺で失礼します」

そう云つと、静かにその部屋を後にして行く。確かに、朔夜は本名で本を書いている。しかし、こんな所にまで影響をおぼしているとは想つてもいなかつた。

朔夜はそんな中、ベッドに横になり気持ち良くなめ息を立てている叶の姿を確認すると、ホッと一安心して持つて来た荷物を部屋に預け夜間看護施設のこの病院を、静かに後にしたのである。

不完全

次の朝早く、朔夜は必要であろう荷物を抱え、電車を乗り継ぎ叶のいる病院へと駆け込んだ。面会の決まっている時間一杯を使って出来るだけの事をしまうとそう想つていたのである。

サンサンと照りつける太陽は、晴天の青空を照らし続けている。

今日は、手術も有るので付き添っていた方が良いだろうとそう想つていた。

入院している叶の都屋に入ると、既に眠りから醒めていた叶が朔夜の姿を目にした。

「遅いな～ドジつちまつたわ～」
と、笑顔で答えていた。

「自殺するような神経は持ち合わせて無いでしょ～～何が起にうたんだい？」

叶のその笑顔がちょっとしゃべに触つたものだから、思わず嫌みを云つてみる。

「さあ？さつぱりやわ。突然後ろから押されたものやから自分でも何が起こったか分からんのや……」

小首をかしげながら叶は不思議そうに答える。でも、犯人が誰なのか見当も付かない。その後、自ら恨みを買う事などして無いとはつきり断言してくる辺り、叶はおめでたかつたりする。

「でももうダメやと想つたわ～あんなに恐怖、感じる事つてなかつたもん～最後の最後に感謝したいんは、今朝、裏に底が厚い靴はかなんで良かつた。ちゅこつちや～スニーカ～やつたから動きが取れたもん」

あつさりとそつ答える辺り、かなりの強運の持ち主かも知れない。

改めて、朔夜は想つ。

「かえでちゃんには連絡しておいたから、明日にでも来ると思いますよ」

その言葉に、満面の笑みを浮かべる叶。どこまでもおめでたい。「鎮骨折れてるんやで……当分バイト休まなかんない 入院費や、手術代もバカにならんのにドジった」

「こういう所は、現実的である。

「叶には、リハビリして動けるようになるまで、安静にしておかなければなりませんね……最低一ヶ月は完治するのに掛かるでしょうから」

朔夜自身、無理はしてもう訳には行かない。たとえ仕事が入ったとしても、自らが動ける範囲の仕事しかできないであろうとそう想つた。仕事も選ばなければならぬ。まるで片腕を無くした気分である。

「あ、塚原さん。そろそろ手術の時間なので、用意しますね」

そこに一人の女看護師が入って来た。

「じゃあ、僕は手術室の待ち合い室にいますから。麻酔が効いてる間は大人しくしててよ」

局部麻酔で手術と聞かされていたので、朔夜は警告する。

「ふえ~い

もともとジッとしているのが苦手な叶は、朔夜に念を押されると渋々答える。こんなに、女の看護師に囮まれると女の子大好きな叶にとつたら騒がずに入れまいとの配慮もあった。

そして、静かに朔夜は待合室へと歩いて行つたのである。

「都住さんですね？ 昨日は初めてまでの挨拶もなく要件のみで失礼しました」

待ち合い室で静かに一人で待つていると、昨夜救急担当してくれた看護師がやつて來たのである。名札を見ると池田とある。

しかしその顔に見覚えがあると判断すると、朔夜はこつこつと微笑んだ。

「昨夜は叶がお世話をになりました。今日は、この手術に関わってはいらっしゃらないのですか？」

手術服を身に纏つていないので、

す訊いてみる。

たい事が「ございまして……」

そういうと、検査室へと案内された。

「これがなのですが……これがいつ事は有る事なのでしょうか?」

長つたらしい真つ白な紙に、波をうつた線が刻まれてゐるその紙

「これは？」

「昨夜から検査していた塚原さんの睡眠時の脳波の検査結果です」

しかし、翌夜には医学の知識が希薄でその脳波の検査結果がどう示されているのか理解に苦しんだ。

「僕にはこれを読み取る事が出来ないので…… 一体どう云う事なの

素直に問い合わせます。

「あ、そりですね……」これを説明するヒ

つまり、池田の云いたい事は、叶にはレム睡眠 자체持ち合せでないとのことなのである。人は、一晩に平均四、五回レム睡眠と、ノンレム睡眠を繰り返しながら眠りに付く。ちなみに、レム睡眠とは『急速眼球運動』を指し示し、ノンレムはその逆。つまり、人は夢を見ながら休息に付く。例え見ていないと想つても、覚えていないだけであつて、必ず見るものなのである。

しかし、計測器からは叶のレム睡眠の脳波計測が出来ず、常に一定のノンレム睡眠から覚醒に到つていると云つのだ。

しかし、計測器からは叶のレム睡眠の脳波計測が出来ず、常に一定のノンレム睡眠から覚醒に到つていると云うのだ。

「それでは、叶は夢を見ていないと云う訳ですか？そんな事が有つて良いはずが……測定器が故障していたと云う事はあり得ないんですか？」

事故での後遺症？困惑する朔夜。しかし確かに以前聞いた事がある。あれは中学生の時、叶は夢を見ないとそう確かに云つた。しかし、自らはそれを否定した。夢は必ず見るものだと意識づけられたいたのだから……

「私達も、故障なのかどうか確かめてはみたのですが、決して故障していた訳ではないのです。そこで夢に詳しい都住さんの意見を聞いてみたいと想いまして」

そこまで言つと、池田は朔夜の言葉を待つた。

こう云つた現象が起こる確率。それは自分の知識には無かつた。だから、医学的にも科学的にもこの事象にどう向かい合つたら良いのか分からず頭が混乱したのである。

考えてみれば、陰陽師を生業としている叶白身、夢に関しては口出しもしてこなかつた。ただ悪夢よけのお札が有る事だけは知つているような事を口走りた事はあつたが、朔夜の前で使つた事は一度たりと無い。

本当に、叶は夢を見ないのか？ただただその事が頭から離れない。

「都住さん？」

考え込んでいる朔夜を不思議そうに眺める池田の視線に気付き、「あ、このことは叶には告知したのですか？」

医学の世界で、法律的に他人にこういった事を漏らしてはいけないと云う秘守義務がある。その事を理解した上で、今回池田は朔夜に口外している訳だ。

「いえ、まだこの事は告知していません。医学的にこう云つたケイスは無かつた為、私達も戸惑つておりまして……」

「分かりました。それならば、この事は叶には秘密にしておいて下さい。現に眠つている時だけの異常な訳でしょ？」

何とか説得したものの、両者とも合点が行かない。

それに、普通に脳波を検査しても異常は見られなかつた訳だ。そう考へると、普段の生活。人体的に問題がある訳では無いとそう判断したのか、池田はそれ以上口出しをしてはこなかつた。

取り敢えずこの時は特異体質。そう考えておへ事に朔夜はしておきたかったのである。

偶然

「お田覚めですか？叶」

手術も無事終わり、叶は痛みの余り一時間ほど点滴を受けている間グッタリとベッドで睡眠をとっていた。

「ホンマ悪いな～これで当分の間、朔夜に顔が上がらん訳や……」
借りなんていくらでも作っているはずなのに、そんな事を忘れているかのように叶はボンヤリと呟く。

「別に構いませんよ。そんな事より、安静にしていて下さいね。治つたらビシバシ働いてもらう事になるんですから」

冷静に微笑む朔夜。

「なあ、それにしてもなんでオレ狙つたんやろか？全く見当がつかんわ」

「それに関しては、警察が動いてくれていますから、叶はこれ以上考える事は有りませんよ。どうやら、殺人未遂事件として捜査を始めているそうですから」

「う～ん。でもなあ～」

「でも何です？」

「本気で殺そうと考えていたんやつたら、来る直前に突き落とせば済むことやろ？あんな時間に猶予を貰える必要なんて無かつたんちやうか？」

確かに叶の云う事は的を射ている。

何かの警告めいた事なのであろうか？そう考へると、朔夜は静かに考へ込んだ。

「ま、事はこのくらいで済んだんやからまだみつけもんやつたって考へるよつにするわ～朔夜が考へ込む事ないやん？」

そうは云われても、ここ最近の下北沢での事件。そして、それが

叶にまで及ぶとなるとこれは一連に何かが起つてゐるかと考へても不思議ではなくなつていて。

「基本的に、事件と云つものは年齢や、季節によつて偏りが有るものなのですよ……それを考へに入れるとな適切な気がします。この事件に關しては、僕も探しを入れてみるとおきまわ」

「そう云つと、面会時間が過ぎるのを確認する。

「じゃあ、また明日来ますから、絶対安静ですよ…」

レム睡眠欠如の叶を案じながらも朔夜は釘を打つて部屋を後にした。

「ほなな~」

軽く朔夜に手を振つて、朔夜は再び眠りに就いていくのであった。

朔夜は、今日持つて帰らないといけない物たちを袋に詰めて病室を出て階段をおりる。そんな時の出来事であった。

「もしかして、朔夜さんではありませんか？」

後方から声が掛かかった。

「あ、神楽さん……」

意外な所で出逢つたことに、朔夜は胸を掴まれるような想いであった。

「どうしたんです？もしかしてこの病院にどなたかお知り合いでも入院されているのですか？」

神楽と初めて私服で対面した。

何を着てもそつなく着こなしている神楽。フォーマル姿の彼女も意外に似合つているなど想つた。和服姿の彼女も何も違和感を感じさせずにいたが、この姿も魅力的である。

「ええ、事故にあつた同居人を見舞いにきたんですよ。神楽さんは？」

「わたくしは、母のお見舞いをしに

少し寂し気に微笑む。

「それでしたら、明日にでもお見舞いに伺いますよ。まだお母さま

にお会いしていませんし」

考えてみれば、先日の一人での話の中に神楽の母が入院していると云う事は聞いていた。まさか偶然にもこの病院だとは想つてもいなかつたが。

「本当ですか？それでしたら、明日にでもいらして下さいませ。わたくしも、朔夜さんの同居入さんのお見舞いをしたいと想つてありますし」

神楽は控えめに微笑む。

叶に神楽を逢わせるのはどうだらうとは想つたが、気持ちだけでも有り難く感じている。

「今日はこれでお帰りになられるんでしょう？わたくしも御一緒しても宜しいでしようか？」

「もちろんです。では行きましょうか？」

少しだけ一人はゆっくりと階段を下りて行つたのである。

「実は明日は、その同居人の……塚原叶というんですか……誕生日なのです。不運にもこんな事になりちょっとバタバタしているのですが」

簡単な成り行きを話し、朔夜は近くの駅まで話を続けた。

「それは大変に御不運でしたね……そう云えば確か、お仕事で手伝つてもらつていると云つてらした方ですわね？」

落ち着いた物腰で問いかける神楽。

「ええ、そうです。もう、中学校の頃からの縁でずっと何かにつけて一緒に行動する仲なんです」

「陰陽師の相方なんて凄く頼もしいですね？」

「良く付き合つてくれていると感謝しているんですよ。叶には、ちょっと、色をつけておいたが、確かに叶には感謝はしている。そんな話をしながら、穏やかな時間を過ごす。時が経つのが早いのか、最寄りの駅まで近く感じられた。

「では、わたくしはこちらの路線を行きますので、この辺で失礼致

しますわ」

神楽は、朔夜とは反対方面の電車に乗り込まなくではならなくて、切符売り場でお別れの挨拶をする。

「ではまた明日。あ、日曜日の件は少し待つていただけんでしょうか？まだ、美術館の調べが済んで無いものですから……」

折角、約束をしたのに、こう忙しいと肝心な事を見落としてしまう。

「結構ですよ。朔夜さんもお忙しいようですし、その事は重々理解しておりますから。時間に余裕ができるようでしたら連絡下さりませ」

朔夜の気持ちを察してか、神楽は微笑んでそう言葉を返す。

「それでは失礼致しますわ」

一度軽くお辞儀をして神楽はゆっくりとした足取りでプラットホームへの階段をのぼりはじめる。

朔夜はその姿を見送ると、暫くしてから反対の方向へと歩き始めた。偶然が呼び起こしたこの状況に感謝しながら。

真実

「バカ／＼＼＼＼＼！」

廊下の端まで聞こえるような甲高い声が、四人部屋の病室を搖るがした。

「あ～ん！かえでちゃん、声でかい～」

周りの入院患者が、何事だと云わんばかりに一斉に叶のベッドに注目した。

「……」

その事に我に返るよつこはつと気がついたのか、かえでは真つ赤になつて備え付けの椅子に腰を下ろした。

「バカだからバカだつて云つたままでよ……」

せつから用意していたバースディプレゼントをこんな所で渡すハメになるなど思つてもいなかつたからである。しかも、楽しみにしていたサプライズ・パーティーもお流れ。

苦心して考えていた事が、水の泡になつた事を考えると、かえではいてもたつてもいられずそう云うしか無かつたのである。

「心配してくれてたんちゃうんか？かえでちゃん！」

少し身を捻るようにして、かえの方に身体を向ける。やうしないと表情が見えない。

『ペシリ』

そんな叶の頃に一発平手打ちが入る。入ると云つてもただ軽くはたいただけだが。

「……事情は朔夜ちゃんから聞いたわ。これ誕生日プレゼント……」

そう云つと、一枚の映画のチケケットを渡された。

「なん？あ、これ俺が見に行きたかったやつやん！」

そう云つと、片手でそれを受け取り眺めた。

「ここにもう一枚有るんだけど?」「

かえではふて腐れたように膝に肘をつべ。

「あ、もしかして、一緒に行つてくれる予定やつたんか?……そんなあ~……」「

『シコン』とくこむ叶の心情は判りやすかつた。どいまでも女運が無い。せつかく用意してくれたチャンスがあつさりと打ち砕かれた訳で有るから。

「この怪我、完治する頃まではやつてるから……やつて治しなさいよ!」

そっぽ向いて赤く煩を染めるかえでに気が付き、

「かえでちゃん、可愛い……」

云つてはならない一言がポツリと叶の口からもれる。それを聴き逃さなかつたかえでは、

「今、なんて云つた?」

まるで、某、映画の貞子のような表情で叶を睨み付けたのである。

「それでは、お大事に……」

朔夜は、神楽の母に挨拶をして、その部屋を後にした。今日は、予定では神楽と共に見舞いをする事になつていたのに、時間になつても現れない神楽を持ち続ける訳にもゆかず、ナースステーションで部屋を調べてもらい、一足先にお見舞いした訳である。

朔夜は、持ち合わせ場所を間違つたか、時間を間違つたのか、色々考えたが結局分からぬままであった。

もしかして、入れ違いで先に行つてしまつたのかとも思い、足を向けては見たが結局は違つた。

「どうしたのでしようね?」

連絡すべき電話番号を携帯電話で鳴らしてみても誰も出る様子は無かつた。

仕方無しに、叶のいる病室へと向う。

広い病院では無いので、階段を降りようとしたその時、まるで昨

田のシユチューニングのよつて声を掛けられた。

「朔夜さん？」

聞き慣れない声に振り返ると、そこには今まで捜していた神楽が立っていた。

「どうしたんです？ その声は……」

まるで初めて聞くかのようなハスキーな声であった。

「すみません。 昨夜、冷房をかけ過ぎて寝てしまつたもので……鳳邪をひいたみたいですね……」

言葉の間に、『コソコソ』と咳き込むのが耳に入った。意外に、おつちょこちょいな人なのかな？ と想いつつも、朔夜は心配げに、

「酷い咳ですね……大丈夫ですか？」

「はい……申し訳ございませんわ。あの、居候さんの……お見舞いだけでも出来るよつて良かつたです……」

「連絡下されば、無理して来て頂かなくとも良かつたんですよ。 今は、これから帰つて安静にしておいて下さい」

顔つきが青ざめた表椿な上に、この声を聞いていると申し訳なかつたと想う朔夜。

「また田を改めても……」

そう云おうとしたが、

「せつかく、お見舞いの品も買って来た事ですし……このままお伺い致しますわ」

神楽はそれでも二コニコ微笑んだ。

確かに、ここまで来てもうつておいて、帰れと言つのも申し訳ない。 そう考えると、朔夜は叶がいる病室へと案内した。

「もう帰る！」

今の今まで痴話喧嘩が続いたかのよつな有り様の所に、昨夜と神楽は叶の病室に入り込んだ。

「あ、朔夜ちゃん！ 聞いてよ～このひくでなしがね～……」

神楽がいる事など目にも入って無いかのようになってしまった。
「かえでちゃん。落ち着いて下さい。ここ病院なんですよ。周りの人に迷惑がかかるでしょ？」

いつもの事ながら、叶とかえでの喧嘩は見なれているのである。だからこそ、今まで、この三人が上手くやつて来れた理由も分りやすい。仲裁に入る？か、ほつておくか？そのどちらかだ。そんな中、叶が後ろに控えた一人の女性に気が付いた。

「どちらさん？」

一瞬、空気が変わる。

「あ、僕の……許嫁の……錦織神楽さんですよ」

戸惑いながらも朔夜は応えた。

「許嫁……？」

かえでと叶は一瞬絶句した。

「朔夜ちゃん……そんな人いたの？」

「ええ……まあ……」

少し照れながら答える朔夜に、

「スケベ……」

叶はひがむかのように言葉をどもらせた。

「錦織神楽……と申します……」

礼儀正しく頭を下げるその姿に、

「かえでちゃん。見習わな～」

流し日でかえでを見る。

ムツとしだが、どう見ても穏やかさをかもし出す彼女に負けている事に気が付き、叶が云う事は正しいとこの時だけはそう想つた。

「あ～！でも、何処かで逢った事ない？変やな～気のせいかな～」

美人と分かつての言葉の弾みなのか、それとも真実なのか？それは分からぬが、叶は、その顔に見覚え有るかのよう表情を一変した。

「いえ……初対面ですわ……事故で怪我をなされたとか？「こちら、お見舞いの品です……早く治られるとよろしいですわね……」

嫌な顔一つせず、神楽は答える。

「叶！あんたは何でも知り合いにするつもり！？」

呆れて物が云えないわと、かえでは、

「じゃあ、あたしそろそろ仕事に行くね。朔夜ちゃん仕事入つたら連絡するね……バイバイ、叶！」

表面上微笑みながらも、叶には眉間に皺を寄せながら挨拶してかえではさつと病室を後にした。

「なんや～かえでちゃんのあの態度！……でもそこがええねん～」

一人の世界に入つていく叶であった。

こうこう時の叶を見る度に、打たれ強いなと微笑む朔夜であった。

「でも、ホンマどうかで会つてへん？」

叶は『マジマジ』と神楽の顔を見る。

普通ここまでされると失礼だろう？と想える程に、叶は神楽を見ていた。でも、そんな事は気にしないで、神楽は優しく否定の言葉を告げる。そんなやり取りをしていた時、突然叶の身に眠気が襲つて来た。

「あれ？変やな～昨日あれだけ寝たのに、眠くなってきた。薬のせいかな～悪いんやけど、今日はこの辺で……」

云い終わらないままに、まるで充電が切れたかのように叶は眠りに落ち込んでいった。

その様子を見ていた朔夜は仕方ないと神楽を見た。今日はこの辺で失礼して、神楽を休ませなけれど想つたからである。

しかし、神楽を見た瞬間、何か今まで気付かなかつた違和感を感じた。それは勘というよりも、もっと適切に云い換える事が無いような何か……神楽の目が一瞬、叶の眠りを楽しんでいるかのような何か……

そしてすぐさまハッキリとこの人は、神楽とは違うーと朔夜は気付いたのである。

しかしその気持ちを抱えつつも、笑顔で、

「じゃあ、行きましょうか？」

優しくこの病室を出るよう、言葉で促した。早く確かめなければいけない事のように想われて……

病室を出て、朔夜と神楽は階段まで歩く。

何故気が付かなかつた？

考へてみれば、こんなに神楽は背が高くは無かつた。それに、完璧に似てはいるものの、表情が固い。それを見越して朔夜は廊下を歩きながら考へる。そして、一か八かの賭けに出たのである。

神楽の腕を掴むと、丁度男子トイレを通り過ぎる時、その中に引きずり込んだのだった。

「さやあ……」

悲鳴を消すかの」とく、ドアを閉めると、朔夜は单刀直入に問う。

「あなたは神楽さんではありますんね……？」

真剣に問う朔夜。

「何の事ですか……」「これは殿方の……」

恥ずかしいとでもいうかのよつた素振りで、神楽はそこから出ようとするが、朔夜には確信があった。

「お芝居はそのくらいにして頂けませんか？神楽さんの弟くん？」

その言葉に、一瞬戸惑つた様子を見せたが、突然、諦めたかのようだ声で笑い出す。

「あはははは～分かつた？意外に早かつたね～結構上手くやつてたつもりなんだけどなあ？」

ぬぐい取るかのよつにして、頭からカシラを取る。それを手に、トイレの壁に寄り掛かつた。

「姉さんから聞いてるだろ？オレ双子の弟の雅樹。キヨウとはバイトで逢つてゐからな……まさかあんな反応されるとは誤算だつたよ。あのお人好しに気付かれるなんて想いもしなかつた。甘かつたな……

……でもここで分からなかつたら、もつと事件起してやるつと想つた
んだけどね~気が変わつたよ!」

何の事を言つてゐるのか朔夜には判らなかつた。

「事件?」

「そう。ここ最近の下北沢での事件だよ」

それでも、朔夜には分からなかつた。何を云つてゐるんだ? 心の中でその事が空回りする。

「俺は天使なんだよ。これでも判らない?」

天使は全てを知つてゐる

確かにそんな言葉だつた。

「賭けをしません? 次起こる下北沢での事件を解決出来れば都住朔夜……お前の勝ち。姉、神楽との事も大目に見てやる。もし解決出来なければ。神楽から身をひけ! 期限は来週の日曜日。それまでに、一件の事件を起す。そうだなあ特別にハンデをあげよ!……このままだと分が悪すぎるだらうからね~ヒントは、『F K N 24』
まるで恨みでもあるかのような表情で朔夜を睨み付ける。

「君が今までの犯行をしているのかい? そんな事を話せば君は……
「俺はね、一つも自らの手を汚して犯行に及んではない、俺はね
……」

朔夜の耳許で囁く。

「!?」

「法には触れて無いや。どうする? この賭け乗つてみるかい? 頼みの綱は、キヨウだつてのにさ~それがこの有り様。この状況を突破出来る物ならしてみな!」

両手を振り上げながら、してやつたりの表情で朔夜を見る。

「何も云わないならこの賭けを承諾した事とみなすが異存はないな

？」

「……もしかして、君が叶を……」

普段冷静な朔夜に全く似つかわしくない表情で強張っている。

「俺だけど、俺ではない……」

そう云つて、カツラを被りなおし朔夜を振り返りもせぬせら笑いながら横を通り過ぎた。

今、朔夜の頭の中は混乱していた。

今今までここつは何を云つていたんだ！？

賭けだつて？

ぐるぐると渦を巻くやの頭は思考回路を遮断した。

俺は誰かとは違つ、完璧な陰陽師だからね……

幽かに囁かれたその言葉が、朔夜の頭を駆け巡つていた。

TO BE CONTINUED

#9 真実（後書き）

後編へ続きます。もし宜しければ、後編もお読みくださいませ。
このシリーズまだまだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5499d/>

占夢者人の夢～弐ノ巻・前編～

2010年10月8日15時58分発行